

## 「湯築城跡保存運動を振り返って」土居敬之介氏著資料の要約

パソコン通信・インターネットが市民運動の広がりに大きな力をもたらした一つの例として

### 1. 湯築城跡を守る運動の始まり

現在地は昔道後動物園でした、砥部町への移転が決まりその跡地利用について愛媛県は日本庭園の計画を発表しました。その後の発掘調査で中世城郭の跡地だと分かり愛媛大学の研究者たちが市民に呼びかけ 1989 年に「道後湯築城跡を考える会」を結成し。

### 2. 県の対応と守る会の運動

1990 年に県は湯築城跡（道後公園）の日本庭園を中心とした整備事業を白紙撤回した。その後湯築城跡を「史跡を活かした都市公園とする」方向を打ち出した。「守る会」は「史跡指定→全面調査→史跡公園」を求めた。引き続き会は湯築城跡の重要性を訴えるとともに、文化財保護のあり方について理解を深めることを目的に講演会活動などを行った。なお、地元紙がいずれも報道し湯築城跡保存運動の強い支援となった。

### 3. インターネット活用による新たな展開

1996 年にそれまでに無かった新しい動きが芽生えた。世界的な規模のインターネットエキスポジションが始まり、その活動の中に「道後湯築城」のコーナーを設けた。その後独立した「守る会」の公式ホームページを開設した。その目的は県内外から広い支援を得ることにあった。当時はパソコン通信が盛んな時代で、ニフティサーブとの交流が湯築城跡保存問題は全国から注目されていった。

### 4. 県知事交代で状況に変化、国史跡へ

1999(平成 11)年正月の選挙で加戸現知事が当選し、その価値を認める発言があり、県は調査完了区域の復元・整備に着手、島津・川岡両代表が加戸知事と懇談、守る会主催の講演会(1999.04)で、湯築城跡の調査員が県内で初の講演を行うなど、それまでは考えられなかった出来事が連続した。そして同年秋、湯築城跡は晴れて国史跡に指定された。

### 5. 情報発信の重要性

愛媛新聞が我々の運動を克明に報道して頂いたこれが強い支援となった。

守る会として情報発信を意識するようになった。その一つがインターネット上にHPを開設したことである。運動開始時から「会報ゆづき」を発行していたが、広がりの面では大きな壁があった。講演会などを聞く前に各マスコミに案内状を送っていたが、それを報道するか否かは先方次第であった。これに対し HP は自分達の意志で発信できる自前の放送局であり、色々な壁を一気に突き崩す有力な武器であるとの考えで開設したのであるが、これが意図した以上の効果を招いたことは前述した通りであり、運動そのものに新風を吹き込んだ。

この報告は土居敬之助氏が書かれている以下のページを要約したものです。詳しくは以下のページを見てください。ここに書かれている運動は 10 年以上に及びました。亡くなられた方数多く愛媛県の人間として残しておきたい出来事です。 二神重則

<http://yudukijou.web.fc2.com/Kiroku/yudukijou-hozon-undou.html>

道後湯築城跡を守る県民の会の目的と活動 URL

<http://yudukijou.web.fc2.com/Kiroku/mamorukai/kai-menu.html>

----- 当時のホームページの一部です。 -----

## 湯築城

松山市道後湯之町

湯月城とも書く。外堀・内堀・土塁・堀切 平山城

現在、北側は「子規記念博物館」、東側は伊予鉄道の「道後公園前」停留所となっている。  
ながく県立動物園であったが、動物園が磁部に移った後、発掘が行なわれ貴重な遺物が出ている。



西側 道後公園停留所付近 外堀。  
正面アーケードは道後温泉。



東側 堀・曲輪跡

伊予国の中、道後平野の押さえとしての位置にある。

山上からは四方の展望が開けている。西に味酒山(現在の松山城)があり、南北 新時代の一時期にはそれが官方の一拠点となつて湯築城と対峙した。

南北朝時代の河野通盛は、伊予における武家方の中心となつて宮方と戦つてゐるが、宮方の勢力は強く、足利尊氏は細川に安芸・上佐の軍を従えさせて通盛を援助している。その頃、宮方では征西府軍領良親王が忽那島(中島)に渡り、宮方は大いに振るい、1342年、土居通世・忽那教範らは湯築を攻めた。通盛はよく戦つてこれを撃退したが、翌年三月、再び湯築城は攻められ、激戦ののち、湯築城は陥落した。しかし、通盛は勢いを盛り返すと、これを奪回した。

戦国時代の1528年~32年、湯築城主は河野通直だったが、跡を継ぐべき男子がなかった。そこで彼は来島城主村上通康を迎へ入れようとした、ところが重臣のはんどんが反対し、分家である予州家の河野通政を推して湯築城を取り囲んで攻撃した。このため通直は来島城に落ち延びた。

結局、湯築城主を継いだのは通政だったが、この時のしこりが尾を引き、村上水軍が河野氏から離叛し、河野氏の滅亡を早める結果となった。結局、伊予を攻め落伏させた、小早川隆景の先頭をつとめたのは村上水軍の来島(村上)氏だった。



「道後湯築城」

湯築城跡を守る県民の会

当時の通信速度では画像が 50k を越えると表示が遅いのでそれ以下に抑えてあります。